

児童中心型教育プロジェクト



なぜ、ミャンマーの教育でCCAが必要なのです？

ミャンマーは、2005/06年の就学率が約90%と高い水準を達成し、初等教育へのアクセス面においては「万人のための教育」(Education for All:EFA)の目標に向け順調に成果をあげています。一方、質の面では最終学年の5年生まで到達する児童数は全体の約70%と、3割の児童が中途退学をしています。その要因の1つとして、暗記暗唱型中心の授業が児童の学習への興味・関心を阻害していることが指摘されています。そのためミャンマー教育省は基礎教育の質を改善しようと、従来の教育方法、つまり暗記暗唱型中心の教育から子ども達の興味関心を配慮し、考える力を伸ばすために様々な学習方法を取り入れた児童中心型教育への転換を目指し、日本との協力で本プロジェクトを開始しました。なお児童中心型教育(Child-Centered Approach、通称CCAと呼んでいます)とは、子どもの興味・関心を最大限に考慮し、能動的で活動的な学習活動を展開していくとする教育です。子どもに決まった知識を単に教えるだけでなく、自由に考え、意見を交換し、実験などで検証作業を行う機会を与え、創造的な思考、問題解決型の思考能力の発達を目指します。



Internal Meeting 2008, Dec



INSERVICE COMPONENT

CCAをミャンマー全国の小学校に広げるため、このコンポーネントでは主に3つの活動をおこなっています。今回はそれぞれを簡単に紹介します。

【カスケード型研修】

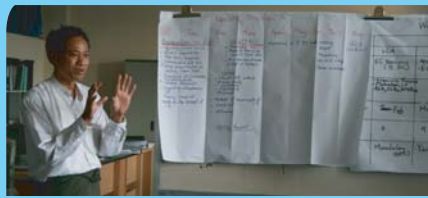
約52,000人の小学校の先生に、CCAを実践してもらうための研修をおこないます。とはいえ、多くの先生を一度に研修することはできません。まず、教育大学の先生を研修し、その教育大学の先生が、各タウンシップの選抜された先生を研修し、その選抜先生が残りの全部の先生を研修するという、カスケード(滝の流れの意味です)型の研修をおこないます。

【自主研修】

研修に1回参加しただけで、いきなり授業が良くなる先生は少ないでしょう。そこで、先生たちが良い授業を行うために、お互いに学べる身近な機会を、授業研究を核とした自主研修という形で導入します。

【モニタリング】

学校管理者の許可がなければ、実際に先生良い授業をおこなうことは難しいですし、悩んでいる先生には、助けてくれる誰かが必要です。研修の後で、先生たちが良い授業をできているかを確認し、困っていることがあれば助け、良い事例があれば紹介するという、学校管理者によるモニタリングの仕組みを作り上げます。

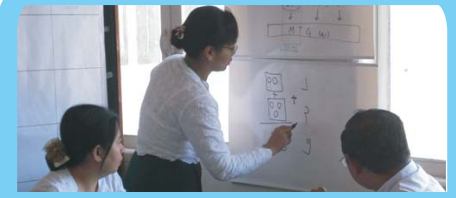


PRESERVICE COMPONENT

コンポーネント1の活動目標は、教員養成学校(Educational College: EC)の教員が学習者中心アプローチ(Learner Centered Approach: LCA)の考え方を理解し、LCAに沿った教え方をECでの授業に導入することです。フェーズ1では、教育方法が専門の教員を中心にCCA研修を実施してきました。ECの教員は大きく、アカデミック科目と教育方法を教える教員に分かれています。フェーズ2では、アカデミックと教育方法の教員が協働して、新しい授業方法を開発することを目指します。

試験的にヤンゴン周辺の3つのECからアカデミックと教育方法の教員に参加してもらい、2月中旬にワークショップを開催しました。同じ学校内でもアカデミックと教育方法の教員はあまりコミュニケーションがないようで、それぞれの立場からの意見交換はとても参考になったようです。各ECで定期的に授業研究が実施できるように、アクションプランを作成しました。

ECでの長期目標は、ECで学んだ学生が卒業後、各小学校でCCAに基づいた教育を行うことです。そのため、教育実習でどの程度CCAが教えられているか調査するための評価シートも現在、開発中です。



MATH GUIDE DEVELOPMENT

私たち算数指導書開発グループ(ミャンマー教師11名、日本人専門家1名)は、小学校第1学年から5学年までの算数に関する教師用指導書を開発しています。

指導書を開発するにあたり、まずはミャンマー教師が3つの作業グループに分かれ、それぞれが担当する学年の指導書を開発します。指導書の中には授業案も含まれるのですが、その授業案の適切性や有効性を検証するために、実際に学校で授業を実施し、その経験に基づき、よりよい授業案、さらには教師用指導書を改善していきます。

一般的に、ミャンマーの先生方は授業案を作成することが苦手だと言われています。もちろん、作業グループでも授業案作成には苦心しているのですが、その開発過程のなかで、これまで当たり前とってきた学習教授活動を振り返ったり、教授法に関する異なる考えを作業グループ内で共有・議論したりすることで、作業グループのメンバー自身が改めて算数教育に関して学びはじめています。こうした学びが、開発した指導書を通してミャンマーの先生方と共有され、より豊かな算数教育の理論と実践をミャンマーの先生方自身の手で築き上げていくための土台となることを期待しています。



Daw Cho Cho Oo Project Manager

Access to and quality of basic education is especially important. The strengthening Child Centered Approach project, with JICA assistants, represents the first programme addressing both access and quality. It has been started since November 2004 and it has planned to disseminate CCA, which attracts students to learn in an enjoyable and pleasant way, to primary schools in 67 townships of Myanmar.



Daw Aye Aye Cho EC Capacity Building Team Representative

LCA is an interesting process, in which learners need to learn , how to learn. LCA is based on collaborating learning and learning will be more enjoyment and excitement. If we construct a learning community for teachers, teachers' professional can be improved. Lesson study is a collaborative professional development process in which teachers jointly plan, observe, analyze and refine actual classroom lessons. The Lesson study workshops were successful because teachers gave constructive opinions to improve their teaching process.



Daw Joanna In-service Teacher Training Team Representative

From January to February 2009, the in-service teacher training team monitored the schools of project target townships, Yankin, Hlegu, Bahan and Hmawbi. In Yankin and Hlegu townships, the lesson structure and teaching skills of teachers are more or less improved. The relationship between teacher and students, and interaction among students are, however, still need to be improved. So we hope they try to improve the RELATIONSHIPS!



Daw Kyi Kyi Swe Mathematics Teacher's Guide Development Team Representative

In Myanmar, CCA is essential method that can give students crucial opportunities of supporting each other for learning, having discussions through their own communication, gathering information and solving problems by themselves. We will implement the CCA method in the whole process of mathematics education by developing Teacher's Guides in order to realize that intelligent students have more creative thinking, average students become more outstanding, and students with difficulty in learning gain more understandable perception.



Math discussion

● インサービスコンポーネント ●

- 2月3日-4日 小学校モニタリング(ヤンキン)
- 2月9日-13日 CCAツール開発ワークショップ
- 2月18日-20日 学校管理者研修1
- 2月28日-3月1日 学校管理者研修2
- 3月11日-15日 マスタートレーナー研修

● 算数コンポーネントコンポーネント ●

- 2-3月 パイロット教師用算数指導書の開発
- 2月6・13日 指導書開発進捗報告会
- 3月2-6日 パイロット指導書開発WS
- 3月11-14日 マスタートレーナー研修へC/P参加(CCAや授業研究に関する研修)
- 3月16-20日 次年次計画に関するC/Pとの協議

● プレサービスコンポーネント ●

- 2月14日-16日 授業研究準備研修
～どうして授業研究をするの?～
- 3月4日-6日 授業研究ワークショップ(バッチ1)Yankin EC
- 3月16日-18日 授業研究ワークショップ(バッチ2)Thingangyun EC
- 3月19日-20日 授業研究ワークショップ(バッチ3)Hlegu EC
- 3月9日 管理者研修 ～授業研究を支援するためのシステムづくり～



CCA Lesson

プロジェクトカレンダー
★ 2009年2月/3月 ★

Workshop of Lesson Study

- DAY 1: Why do we apply Learner Centered Approach in EC?
How do we improve our teaching?
What is learning community and Lesson Study?
- Day 2: Let's think of Lesson Study in Myanmar Style.
Demonstration Lesson and Discussion
- Day3: Let's make action Plan.
"Good practice" System to share criteria of "Good".



2009年2月14日から3日間、BERDCでECの教員を対象とし授業研究に関するワークショップを実施した。参加した教員は、ヤンキン、ティンガンジュン、レグーの教育大学（Education College 以下EC）の教員18名である。ECの全教科を語学系（ミャンマー語と英語）、理系（数学と理科）、社会系（地理と歴史）の3つのグループに分け、それぞれのグループから教育方法を教えるメソドロジー教科と専門知識を教えるアカデミック教科の教員を一名ずつ選出した。ECでは、メソドロジー教科とアカデミック教科は同じ教科であっても教員同士が交流し意見交換をすることはほとんどない。EC校内でメソドロジー教科とアカデミック教科の職員室が別々になっていることや、教員研修でも両者を別々に研修することが多かったこともその理由のひとつである。実際、本プロジェクトフェーズ1でも、対象はメソドロジーの教員のみであった。

フェーズ2では、アカデミック教科においてもLCAの実践を促すためアカデミック教科の教員も研修の対象とする。アカデミック教科でLCAを実践することは決して容易ではない。その理由は、(1) 学生が学習する教科内容が膨大にあるにもかかわらず十分な授業時間を確保できないこと、(2) LCAを実践することによって学生から出てくる多様な疑問や好奇心に対して教員が答える知識や経験が十分でないこと、また(3) 学生が課題や疑問を追究するためのリソースがかなり不足していること、(4) 教科書が英語であるため、教科の内容を理解させる（暗記させる）のが精いっぱいであることである。しかし、アカデミック教科において暗記中心だけの授業を実施している限り、学生に「教育方法はLCAで、教科内容を教えるときは暗記中心の教え込みの方法をとる」と認識させてしまうことを避けられない。教科別に教授方法を決定するのではなく、すべての教科において授業の中で起こる出来事（状況）に合わせて授業方法を変えていくような力が教員に求められる。

ECで授業研究を実施するための準備研修

ECコンポーネントでは、ECの教員が教科によって方法を変えるのではなく、状況や学習目的に応じて教授・学習法を使い分けられることをめざし、その具体的な方法として授業研究を導入する。今回の研修はそのための第一歩としての取り組みである。本研修の目的は、以下の3点である。

- (a) 考える（疑問を持つ、分析する、比較する、創造する）楽しさを実感できる
- (b) 協同学習の意義を確認する（協同で問題解決をしたり、意見交換することで多角的に物事を理解したり協同する面白さを発見する）
- (c) ミャンマーのECの文化に合った授業研究を計画することができる

研修終了後、教員にアンケート調査およびインタビューを行ったところ、以下のようなコメントを得ることができた。「ECにはやる気のある先生だけではないので、他の教員の考えや経験は自分の授業を考える上で役に立つのでがんばってやってみよう」「他の先生の授業を観察することで、質問の仕方や学生の関心を集める方法を学んだ。自分の授業でも取り入れてみようと思う」「CCA/LCAについては、グループ活動することだと理解していたが、他の教員の意見を聞いて、そうではないということが分かった」「他の教員は自分が思いつかないようなことを考えていて勉強になった」「学生がどう学ぶのか、という見解を他の教員と共有することは授業改善の上でとても意義があると思う」など肯定的な意見を多く得ることができた。一方、「アカデミック教科の教員と一緒に授業研究をするのは無理だと思う。別々にしたほうがいい」「授業研究は誰が参加するかで価値が判断する。やる気のない先生を巻き込むのは簡単なことではない」「自分の関心と他の教員の関心が違う場合、授業研究は難しい」「今の授業で満足している教員が多いので、他の教員の意見を聞いたり受け入れたりしてもらえないこともある」といった不安の声も少なくはなかった。来年度から前述した3つのECで授業研究を開始する。ECコンポーネントではモニタリング・支援を定期的に行い、ミャンマーの教育大学の文化に合った授業研究のシステムを構築することをめざす。



Demonstration Lesson



Discussion about Demonstration Lesson



Making Action Plan



Poster Session

Bloc Teaching Monitoring

レグー地域の学校へ教育実習の視察に出かけた。本来この時期は教育実習の次期からは外れているのだが、ECによっては時期をずらしたり、少し長めに教育実習をしたりすることができるらしい。今日訪れた2つの学校にはそれぞれ2名ずつヤンキンECとレグーECの学生が教育実習に来ていた。

はじめに、教育実習生の授業を視察した。CPは全員教育心理か教育方法の教員なので、自分たちが教えている学生がどのようにECで学んだことを活かしているかを知れるいい機会になったようだ。実際、レグーの学生はDWTGの学生で、ヤンキンの学生はDAACとDAAMの学生だった。DAACはヤンキンの学生の実践を見て非常に満足していた。

校長先生へのインタビューを通して興味深かったのは、教育実習のインパクトである。教育実習生がはじめて学校に来たときは、試行錯誤しながらなので校長もシニアの先生も助言し、支援していた。ある程度彼らが学校に慣れてくると、彼らがECで学習した方法(CCA)で授業を展開するようになる。校長もシニアの教員もその授業を観察し、自分の授業と比較してみても、彼らの授業の方が子どもが楽しく、積極的に、一生懸命勉強に取り組んでいることが分かった。校長はCCAの研修(JICAのPPTやユニセフのライフスキル研修)を受けたことがあるので、それが児童中心型教育(CCA)ということに気づいた。そして校長自身もCCAについて意識するようになったという。また、シニアの教員も自分の授業で教育実習生のアプローチを取り入れるようになったという。たとえば、ストーリーテリングというアプローチは教育実習生がECで学習したものであるが、子どもはストーリーテリングで学習するとかなり学習意欲を高めるという。そこで、CCAのことを全く知らない教員もストーリーテリングを取り入れるようになったそうだ。



さらに、教育実習生がCCAを実施し、わからないことがあるとシニアの教育や校長先生にアドバイスを求めることが多々あるという。校長先生もシニアの教員もCCAについてよく知っているわけではなかったが、CCA Teachers' Guideがあることを思い出しそれを参考にしたり、全員で一緒に授業を考えて問題解決に取り組んだりするようになったという。たとえば、教育実習生がグループワークを実施するがなかなか子どもをコントロールできない。校長とシニアの教員が授業を観察して、5人を1グループにしてみよう、と試行錯誤しながらうまくいく方法を考えたという。その結果、Teacher's Guideに完全に頼るのではなく、自分たちで“良い”と思う方法や授業を考えるようになったそうだ。そして、Teacher's Guideに沿って授業をしても必ずしもうまくいくわけではないことや、カリキュラムとのずれがあることから必ずしもTeacher's Guideに書いていることがそのまま適応できないと理解したという。一方、初めての授業ばかりを経験する教育実習生にとって、授業をイメージし組み立てることは非常に困難なことである。そこで、Teacher's Guideが参考になるという。この点が経験のある教員との違いと言える。経験のある教員はどうすればある程度授業がまわるかという経験知を持っているので、Teacher's Guideがなくても授業ができる。しかし、教育実習生にとっては、Teacher's Guideは一つのロールモデルとしての授業が書かれているのでそれを参考に授業をイメージすることができるのだ。そういった教育実習生の取り組みを見て、校長やシニアの教員も影響を受け、CCAを意識し、うまくいったアプローチを自分の授業でも取り入れるといった相互作用が起こっていた。

校長先生が言うには、教育実習を受け入れていない他の学校を比べると次の2つの点で大きく違うという。ひとつは、教員の人数が増えるので、一人一人の教員の時間に余裕ができることである。その空き時間を使って他の授業の観察をしたり一緒に授業を考えたり、教材を作ったりすることができるようになったという。もう一つは、ECの学生が新しい方法を授業で実施するため、他の教員もその刺激を受けるということである。もちろん、教育実習生が現場経験を通して学ぶことは多いが、教育実習生のCCA実践を見ることで他の教員が自分の授業と比較して子どもの様子が違うことに気づき、CCAに関心を見せることも多いという。今回視察したYin Teik Pin校長とPhayar Khone小学校の両校長がほぼ同じ見解を示していた。

レグー地域はCCAのパイロット校なので、こういったポジティブな見解を得ることができたが、他の地域はCCAを地域全体で取り組んでいるわけではないので、2009年度のモニタリングでは、他の地域の教育実習の現状を調査する必要があるだろう。そして、もし教育実習による同じようなポジティブなインパクトがあるなら、教育実習に対するインプットを増やし強化することも重要だと思う。

